国士舘の思い出

思い出の記

元国士舘大学福祉専門学校助教授　江崎　澄子

一、専門学校設置準備室の時代

一九九四（平成六）年四月一日、太宰府キャンパスに国士舘大学福祉専門学校準備室が開設され、私は入職した。

一九九五（平成七）年四月、国士舘大学福祉専門学校開校に向けて教室棟の改修及び実習棟の増築が始まっていた。

準備室員は、教室棟一階の事務室及び学生食堂で業務をしていた。廣渡修室長（開校後は校長）と私の二名は教務関連の書類の準備にかかった。まず、福岡県下の既存の介護福祉専門学校を訪問して資料を集めた。それらの資料と国士舘短期大学の資料を参照しながら、国士舘の教育理念である四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」を理想の介護福祉士を育てる基本理念に置き、学生便覧を作成した。

カリキュラムは、社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則に沿って、一般教養科目・専門科目はすでに出来ていた。特別科目は他校にはない本校の特性として、救急法・陶芸を入れ、教科外活動では、実習施設の年間行事を参考にしながら作成した。

太宰府キャンパスは、国士舘の中では一番敷地が広く、山林に囲まれ、グランド、体育館など設備が整っていた。それらの施設利用は、開校後生徒のアイデアを取り入れながら一緒に考えることにした。

国士舘旗争奪高校剣道大会は、開校前と同様に継続することになった。体育館の活用及び専門学校の広報活動

2004（平成 16）年　太宰府キャンパス全景

を兼ねて夏季休業中に実施した。関西・九州各方面から剣士が集まり、応援を含めると延べ人数は一〇〇〇名を超え、太宰府キャンパスは人があふれ熱気があった。

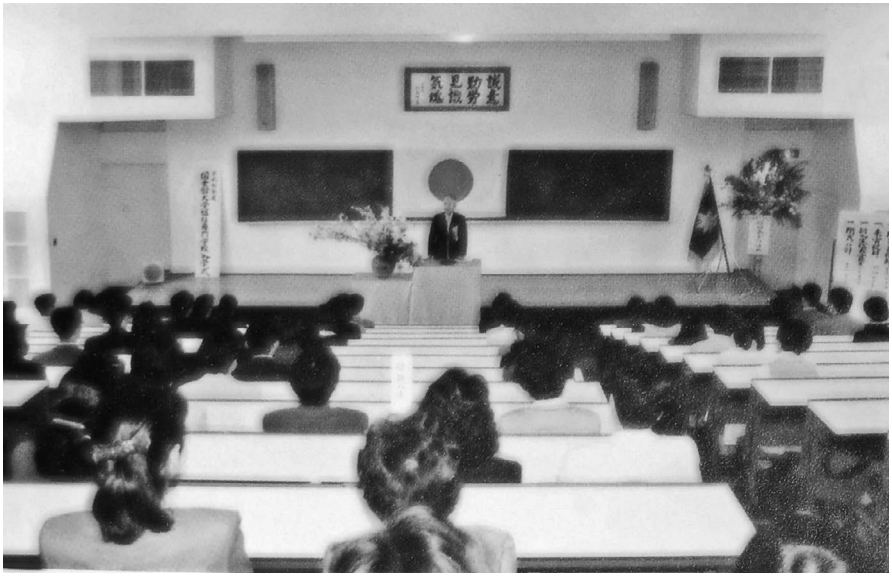
入学式会場の教室棟五階の階段教室には、松島博理事長の筆による教育理念の四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」の額を掲げて、第一回入学式を迎える準備が整った。

二、教員時代

一九九五（平成七）年四月一〇日、第一回の入学生は、一四八名の受験生の中から選考された四四名であった。式典は、松島博理事長を迎えて厳粛に執り行われた。

入学生代表は、最年長者のMさんが代表の挨拶をされ、「二〇年ぶりに一〇歳代の若い人と椅子を並べて学ぶ事はとても緊張するし、授業についていけるか心配です」と気持ちを述べられた。しかし、二年間無欠席で、同級生からはお母さん的存在として慕われ、成績優秀で卒業式でも代表の挨拶をされるほどであった。

新入生の指導では、介護は主に高齢者対象の仕事が多いので、礼節を大切にし、登校下校時やすれ違った時、



1995（平成７）年４月10日　第１回入学式

授業開始終了時の起立礼など声を出してのあいさつを励行した。服装は、短パン、草履、ノースリーブ、透ける服などを避けるようにした。「義務教育の延長で細かすぎる」との生徒の反応もあったが次第に浸透していった。

国立夜須高原少年自然の家（福岡県朝倉郡筑前町）での一泊研修は、介護福祉士になるという志を高めるために、「理想の介護福祉士像」のテーマで、グループワークをした。徹夜でのグループワークは、活発な意見を出して共通の目的意識ができ、それらを模造紙にまとめて翌日発表した。クラスの仲間意識が芽生え、私はこれまで看護専門学校で一三年間教鞭をとってきたが、福祉については、初めての経験で知識が乏しく不安があった。講義で困ったことは、私自身が福祉の現場体験がなく、看護体験を話すと、生徒から「私たちは介護福祉士を目指しており、看護師を目指していません」と指摘され、これを契機に私は福祉大学へ編入し、福祉施設の現場実習を体験した。こうして生徒と共に私も成長していった。

終末期介護の講義の時、Y生徒が叔母の看取りの体験を詳細に作文に書いてくれた。その作文を読み上げながら、妹の死と重なり途中涙で読めなくなったが、生徒は

静かに聞いていた。心に残る体験であった。

教課外活動では、福祉施設で実施されている行事を取り入れた。季節行事の餅つき、七夕、ゲートボールなど生徒が計画・立案し、実施した。就職後、福祉の現場のレクリエーションで活用できるよう工夫した。餅つきは、生徒の体験者が少なく、近隣の高齢者の参加をお願いして生徒と一緒に実施した。最初は興味をしめさなかったが、餅米を蒸し、杵でつき、餅丸めなど作業をするうちに、高齢者との話し声や笑顔が出てきた。

七夕会では、校庭にある笹竹を切り、こよりを縒り、短冊を下げた。短冊には、「卒業ができますように」「彼女ができますように」「車の免許が取れますように」などの願い事が書いてあった。

救急法では、一次救命法及びＡＥＤ使用法を実施した。

専門学校で救急訓練―今年七月非医療従事者の使用が可能になったＡＥＤ（自動体外式除細動器）を使用した救急講習会が一五日、太宰府市御笠の国士館大学福祉専門学校で実施された。ＡＥＤとは心臓が何らかの原因により細かく動き始めて、体に血液を送り出すことができない状態になった際に、電気ショックを与えて正常な状態に戻す機械。民間にはまだ普及していない。講習会には生徒や教職員約五十人が参加。参加者は「予想以上に簡単ですね」と驚きながら体験していた。

（二〇〇四・一一・一五　太宰府広報より抜粋）

研修旅行では韓国日系婦人保護施設「慶州ナザレ園」を訪問した。園は終戦後韓国に残された日本人女性の一時避難場所であったが、後に日本人独居老人の収容施設になった。園内を見学すると、居室はすべて和風の個室で、日本の写真や置物が飾ってあった。日本の身元引受人がいない人、韓国国籍者や死亡扱いなど日本に帰れない人が入園されていた。Ａ生徒と私は、八〇歳代の女性から話を伺った。「京都出身で韓国男性と結婚するも死別し、独居生活が困難なため入所したが、最初は寂しくて日本に帰りたかった。当時は、園のそばにある高台から日本列島を眺めて泣いていました。しかし、日本に一時帰国した人の話では、最初は歓迎してくれるが遠慮しながらの生活より、住み慣れたナザレ園の生活の方が楽しいと聞き、私は近親者がいないので日本には帰りません」と話された。園では日本の歌を歌っていると聞いたので、「北国の春」「故郷」をみんなで合唱すると、入所

者より生徒のほうが涙ぐんでいた。帰りには、園の外まで見送りに出て、いつまでも手を振ってくれた。

翌日は、慶南専門大学校学生と通訳を交えて「福祉全般について」意見交換をした。その後、校庭での交流は、英会話や身振りで和やかな雰囲気が見られた。後日、国士舘大学福祉専門学校を訪問された時は、七夕飾りやお抹茶でおもてなしをした。韓国にはそのような文化はないと興味を持たれた。

体育祭では、保護者や近隣の方が一〇〇名ぐらい参加され、障害物競走やゲームなどで盛り上がり、終了後は、生徒が作ったカレーを一緒に食べながら「アットホームでいいですね」と笑顔で話が弾み、後日保護者からお礼の手紙をいただいた。

また、実習施設の入所者を招待し、車いすゴム風船バレーや車いすフォークダンスなどを一緒にすると、「楽しかった。また来たいです」と話された。

学園祭のテーマは「おいでなさい」に決まり、ラジオ放送、西鉄大牟田線駅のポスター掲示、路上の宣伝チラシの配布など広報も工夫した。全員で分担して準備し、時間はかかったが、近隣の方や子どもたち、保護者や知人など多くの方が参加され、食べ物・不用品・梅干しのバザー、介護体験、障がい者体験など大変な盛況であった。

開校五周年記念は、公開講座の講師にロサンゼルス及びソウルオリンピック金メダリストの国士舘大学体育学部教授斉藤仁先生をお招きして、「金メダルへの道」を講演していただいた。会場は超満員で椅子を追加するほどであった。斉藤先生の知名度が高く、特にご年配の方が多く参加され大盛況であった。先生の温和なお顔からは想像もできない、自分に厳しい練習を重ねてこられた人生を知ることができた。

就職相談や指導は、実習施設へ求人依頼や福祉の職場説明会への参加など教職員が分担して行った。また、卒業生を招いて「福祉職場の現状」の説明会を開催した。

求人は四～五倍ぐらいあったが、三〇歳後半から四〇歳台には雇用条件が厳しかった。

就職後に職場訪問をすると、職場の一員として第一線で適切な介護を展開している姿は頼もしく、施設長からは、「勤務態度やスタッフの評判もよく信頼できる」とのお褒めの言葉を聞くことができた。

三、介護実習施設の巡回指導

介護実習施設（以後施設という）は、身体障がい者を

対象とした施設、身体障がい児を対象とした施設の約一五施設に生徒は二～四名ずつに分かれて実習に行った。施設は交通の便が悪いところが少なくなく、生徒の多くは自家用車での通学となったため、交通事故が心配であったが、一一年間で事故の報告はなかった。交通機関を利用すると二時間近くかかる施設もあり、実習施設に宿泊して実習した。

教員は、各施設へ週二回巡回指導に行き、まず指導者に実習状況を聞き、生徒からは、実習内容や困ったことを聞き、生徒間の情報交換や助言をする。実習でトラブルがあり呼び出されることもあった。入所者の花瓶を割る、移動時の打撲や転倒など、特に入所者に身体的外傷を負わせた場合は、施設長や指導者にあいさつに行き、生徒が精神的に落ち込んだ場合は、学校で指導したこともあった。

生徒から「入所者がいつもと様子が違うと指導者に報告すると、バイタルサインのチェック（血圧・脈拍等測定）をし、変わりありませんと言われたが、その夜亡くなられた」との報告があった。生徒はショックを受けていたが、翌日は実習に行っていたので安堵した。アセスメントの重要性や様々な貴重な体験は、これからの介護福祉の仕事に生きるはずである。

ケーススタデイ集

巡回指導で一番多かった相談は、実習日誌が書けないことであった。施設の更衣室を借りて一緒に考え、電話相談は深夜に及ぶこともあった。

実習の総まとめをケーススタディ（事例研究、卒業論文に代わるもの）として実習施設別に全員発表した。講評は、実習指導者や実習施設に就職した卒業生に依頼した。質疑応答では活発な意見が出て、発表者が答えられないときは卒業生がフォローするなど、とても有意義な時間を共有することができた。

四、閉校式

二〇〇一（平成一三）年の第七期生の頃から受験生が減少した。県下に介護福祉養成校が開設当時は七校であったが、平成一六年には二四校（学科を含む）に増加し、生徒募集が困難になった。また、高校へ生徒募集に訪問すると介護福祉を希望する生徒が減ってきたと言われた。それは、介護福祉現場の労働待遇が悪くなり（福祉制度の変更や入所者の重度化による職業病）離職する人が増えたことも影響していた。生徒増に向けて対策会議を重ねてきたが、効果は上がらなかった。若者にとって福祉職場が魅力的なものでなくなり、本校のみでなく

2007（平成19）年3月15日　閉校式

周辺の介護福祉専門学校も閉校の声が聞こえてきた。

二〇〇七（平成一九）年三月、第一一期生の卒業式を最後に閉校することになった。太宰府キャンパスは、敷地が広かったこともあり、卒業後に母校を訪問した際の思い出となるよう記念樹として、実習棟横に毎年いろは楓（国士舘の校章）を植樹していた。閉校時には一一株になっていた。

五、旧太宰府キャンパスのその後

二〇一三（平成二五）年四月一日、太宰府キャンパスは太宰府市に譲渡移管され、同年七月二七日、本学及び太宰府市合同による除幕式が執り行われた。

跡地には、記念碑「国士舘太宰府校地跡」と卒業生一同寄贈「念ずれば花ひらく」の二基が並べられ、後方には国士舘校章のいろは楓が三株植樹されていた。

除幕式には、元国士舘大学福祉専門学校同窓会役員に声掛けをすると一〇名が出席してくれた。卒業生と近況や専門学校時代の思い出話をしながら当時を懐かしんだ。

「記念樹は元気に育っていますか」と誰かの声が聞こえた。また、専門学校で培った思いを語ってくれた卒業

卒業記念樹

生もいた。「現場で働いてみて理想と現実の違いに挫折しそうになった時、同級生の声を聴くと勇気と活力が湧いてきた」「施設実習で、授業とのギャップを強く感じ、様々な人生を歩んできた高齢者を介護するのだから介護の勉強に終わりはないと思った」などなど…。

その他、研修旅行、学園祭（おいでなさい）及び体育祭などの行事についても、一つ一つが生徒の手作りで、遅くまで意見を出し合って作り上げたことが大切な思い出となっているようであった。

二〇一六（平成二八）年六月二〇日、旧太宰府キャンパスを訪れた。国士舘大学の名称を外された門を入ると、旧教室棟の外観は耐震補強がなされ、クリーム色に塗装されていた。玄関へ入ると、受付があり、応接テーブルとソファーは、私が就職した初日に座ったもので感慨深かった。旧食堂のテーブル・椅子は当時のままであった。

二階の旧教室は、施設課・上下水道課になっていた。三階は、校区自治協議会等の会議室、事務室になっていた。四階の旧図書館は倉庫、五階の階段教室は、当時のままであった。舞台には、演台と花台が並べられ、「寄贈平成九年三月一八日　国士舘大学福祉専門学校第一期卒業生一同」の名称が刻まれ、当時のままであった。式

記念碑「国士舘太宰府校地跡」と卒業生一同寄贈「念ずれば花ひらく」
（国士舘大宰府キャンパス跡地）

五階階段教室と第１期生寄贈の演台と花台

典（入学式・卒業式）を一一回繰り返し、全員で国士舘舘歌を手話で唱和したことを想い出し、懐かしかった。手話による舘歌は、専門学校の特色でもあった。

旧実習棟の介護実習室、入浴実習室、調理実習室は、太宰府市公文書館の事務室及び資料室に改装されていた。校舎からグラウンドへ続く道の両側にあった桜の樹は一段と大きくなっており、グラウンドは整地され運動公園になっていた。体育館は、当時のままであったが、外壁は一部剥げていた。

卒業記念樹は、一一株が九株になっていた。記念樹の前には手作りの木製表札を建てていたが、見当たらなかった。しかし、九株の記念樹は大木に成長しており、嬉しかった。卒業生が訪れるのを待っているかのようである。第一期生から第一一期生までの様々な思い出が走馬灯のように甦ってきた。